枯山水論の行方

木村三郎*

On the Principle of "KARESANSUI" (Dry Landscape)

Saburo KIMURA

摘要：枯山水という用語はどわが国の庭苑手法を代表する歴史的用語は見当らない。今日まで造園史家が論及の対象としたのも当然であるが、これが単なる造園界のみにとどまらずわが国思想界における日本人の心情のあらわれを示す(わび)(さび)さらに(幽玄)(余情)のような表現語としてもしばしば活用されていることに驚きを覚える。そこで改めて造園界における専門語としての枯山水の歴史的な推移をいささか究明して見たい。

1. 発端

枯山水という用語はどわが国の庭苑手法を代表する歴史的用語はない。したがってこの用語にふれない造園史家はまず皆無と云ってさしつかえない。ところでこの用語は単に造園界に止まらず広く今日のわが国思想界一般の間にも「わび」「さび」、さらに「幽玄」「余情」などという日本人の心情にかかわる用語として活用されていることに気づく。それだけ枯山水論の研究の幅の広がりがわかる。

例えば、かつてノーベル文学賞(1968)を受賞した小説家川端康成のスウェーデンにおける記念講演「美しい日本の私：Japan, the beautiful and myself」の中で枯山水論が折り込まれている。その一節に「日本の庭園もまた大きい自然を象徴するもので西洋の庭園が多くは均整に造られるのにくらべて日本の庭園はたいがい不均整に造られ、しかも、この不均整が均整よりも多くのもの広いものを象徴出来るのである。勿論この不均整は日本人の複雑微妙な感性によって釣り合いが保たれての上のことであって日本の造園ほど複雑・多趣・綿密したがってむずかしいものはない。『枯山水』(dry landscape)という岩や石を組み合わせるだけの法は^{So}の『石組み』(arrangement of the rocks)によってこそない山や川、また大海の波の打ち寄せる様まで現れる。その凝縮を極めると日本の盆栽(dwarf garden)となり盆石となる(Compressed to the ultimate, the Japanese garden becomes the bonsai, or the bonseki, its dry version)」と述べたことが知られている。本稿末尾附図参照

その後現代の文学者唐木順三もその著『日本人の心の歴史(否定の美学)』(昭51)の中で「枯山水」にふれ「枯

山水という言葉はそれ自身面白い。こういう言葉、またその指示する対象が何時どのようにして出現したかを私は知らないがいつかは禅宗中心の文化が起った時期のものであろう。苔寺という通り名で知られている西芳寺は夢窓國師の造るところといわれるがその上の段に枯山水がある。大徳寺山内大仙院のそれは殊に知られている。龍安寺の石庭をそれに加えてもよい。いづれも室町時代のものであろう。我々のいままで見て来た庭は大体家持などがわが宿の萩、橘、梅と詠っているような草花のある庭、また源氏物語の中に出てくる六條院の庭のように春夏秋冬それぞれの草木をもつ池、瀧などのある庭であった。そしてそういう庭が凡そ庭というものの常識であったことは平安時代にできた『作庭記』によっても知られる。ところで枯山水においては草木も花も否定され山水は枯れて流水もない。そこにあるのは石、石組みだけである。王朝時代においても池、泉水、瀧、せせらぎを作ったのだから石は使われたに違いない。然し石が石として、それ自体が美的なものとして鑑賞されるにいたったのは恐らく足利時代からであろうか。石だけを肯定して他の一切を拒否する精神はたとえば墨一色を肯定して他の色彩を拒否する墨絵のそれと共通している。一切否定の無また空に定位してわずかに一物を設定するということはどういうことであろうか。一物もなき空無中の空無ではなぜいけないうか。云々」と。この哲学出身学者(1980没)の問いかけも、その一例にちがいない。

それだけ造園界における枯山水論議も独自の見解をしっかりとたねばならない必然がある。

さて、明治の世代に入って早くからこの枯山水にふれたのは横井時冬の『園芸考』(明22)といえよう。この横井の『園芸考』を高く評価した森鷗外の論文「園芸小考」

(明29, 別名園芸略説)には真山水と假山水の用語はあるが然し枯山水はない。もっとも『園芸考』それ自体も『作庭記』を紹述する、その中でしか枯山水のことは出てこないから鷗外が言及しないのも当然のことであったかも知れない。ただ横井は上書の別の部分で後成恩寺関白一条兼良著『尺素往来』(1481)にふれ、その中の「假山水者海様河様地様泉様遺水様岩井様細谷川様枯山水様、山形野形洲浜形葦手形、云々」の語句をあげ枯山水を假山水の単なる一手法の極に限られた一部分の用語として見ているのが窺える。さらに付言すれば『作庭記』それ自体も『尺素往来』同様(水なき庭)における石組みの一景ぐらいにしか考えず今日のように大問題視してはいないと見るのが正しいように思われる。

これを真正面に強調している唯一の文献といえば江戸時代に入ってその後期の考証随筆『嬉遊笑覧』(1830)で、この随筆(「日本随筆大成」所収)の枯山水論は今日の研究書(例えば重森三玲著『枯山水』(昭40), 吉川需著『枯山水の庭』(昭46)参照)等でも引用されている。しかし本稿とも重要ななかかわりの深い記述であるので、その枯山水論及びその前後の記述を含めて引用すると次の通りである。すなわち「(前略)又庭を作るを山水作ると云う。『鴨長明無名抄』にたとえば山水を作るに松をううべき所には岩をたて池をほり花をさかすべき地には山を築き眺望をなすが如し。『東鑑』に阿闍梨静空が弟子静玄法師に二階堂の石を立てさす処にのすぢ鴉会と云うことみゆ、のすぢは野筋なり、鴉会は鳥合の義歟、但し鴉の羽はす石と云うこともあれば鳥の居集まるべき処の石にてもあるべし。『尺素往来』に假山水(以下、上述の通り)と有り名目大概出たれども猶数多あるべし。此の内に枯山水を古写本にもフルセンスイと訓あるはわろし。枯を古と誤りたる本ありて後人まがひて点を付けたるにや。音にてよむべし。『作庭記』に池もなく遺水もなき所に石を立てるこれを枯山水と名付く、その枯山水のようは片山の岸或は野筋などを作りてそれに取付けて石を立つるなりと有り。『神代記』に青山を枯山となすとあれば枯山水の枯をからと訓し点は非なるべし。野筋『夫木』慈鎮和尚(夏木立庭の野すぢの石の上にみちて色こき深み艸かな)、又按ずるに今庭にせんすいといふはもと山水なるを池にのみいふは非なり、それは泉水の心にや、池は泉のみにあらず、云々」と。かなりうがった枯山水論であることが判る。そこで明治以降にこのような枯山水論議がいつ頃から始まったかを更に考えて見たい。

まず文芸家の間では小説家立原正秋の最近の著『日本の庭』(昭52)の中に枯山水に言及した数章があり、その中で小説家志賀直哉の(「竜安寺の庭」1924)にふれ、そこで志賀はこの代表例として竜安寺のほか大仙院などの石庭をあげて論及したという(しかし枯山水の用語は出て来ない)。なお立原は言及していないが、それから凡そ

10年ほど以後に小説家室生犀星にも竜安寺や大徳寺方丈や大仙院西芳寺等の石庭を論じたもの(「京洛日記」1934)があって、その中で西芳寺について(枯山水を模した石の大群)という表現が使われている(暁教育図書刊『庭園の美、昭55』所収)。すなわち枯山水という表現が文芸家の間にも既に馴じみのものであったものと思われる。冒頭にかかげた川端康成もその頃34〜5才の新進文士であったとすれば枯山水の用語と全く無縁ではなかったのかも知れない。もっとも、ノーベル文学賞受賞の2〜3年以前に出版の一般教養書『現代教養文庫 582』(「社会思想社刊、昭41)を見ると、次のような枯山水論(村井康彦述)がある。「ふつう枯山水と書くが文献の上では假山水・故山水・乾山水・唐山水といった用語も見え、したがってその読み方も雑多であったと思われる。カレンスズイ・コセンズイ・フルセンズイ・カレンスズイ・カラセンズイ等々。なお故は枯に通ずるものであり、乾は水が涸れた意であり、唐は中国様の意味であろうが、いずれも枯山水に関連している用法であることは言うまでもない。もっとも『山水』とは自然の風景そのものをいったが、それが鎌倉時代に入ってからその自然をうつしとった庭園のこととされるようになった。だから山水は自然主義的写実的な庭園であり、枯山水はその反対に仮の山水つまり超自然主義・抽象主義・象徴主義にもとづく庭園ということになる。枯山水などより假山水とするほうが本義に近かいといわれるゆえんである」と記している。このような解釈は既に重森三玲著『枯山水』(昭40)の中にも詳述されているから一般的見解として定着したものと見てさしつかえない。なお上記の教養書は「したがってこうした庭園が禅宗寺院を中心につくられたことも当然のことで、文明九(1477)年美濃瀧沼の自坊に庭をつくり「假山水譜並序」をあらわした鉄船宗熙によればそれは(三万里程尺寸に)縮めたものであり、単なる風景のミニチュアというのではなく限られた小空間が無限の深山幽谷や大海を表わすのである。正にそれがもつ極度の抽象性と象徴性とが時代をこえて現代の前衛芸術にも通ずるのである」とある。これは前記の重森も言及しているし、古くは京大故西田直二郎教授の大正十三(1924)年講演集(『日本文化史序説』)にも既にまとまった枯山水論(大仙院・竜安寺庭園)がある。そこで改めて造園界の経過を探ねて見たい。

2. 枯(カレ)山水対假(カリ)山水

これらの用語を造園史的にながめると、枯山水→假山水→假山→築山(庭造)の方式が考えられる。その中で隣国中国を先例とすると、假山のみが浮んでくる。

時代は比較的新しいが、中国によく知られている『園冶』と題する造園書がある(上原敬二編「造園古書叢書」第十巻参照)。明後期崇禎七(1635)年に刊行されたもの

で、わが国では寛永十二年三代将軍家光の時代に当る。そして水戸藩中屋敷後楽園に關与したという明儒朱舜水が来日したのが万治二（1659）年であるから舜水が同書を持参したとしても不当ではない。しかしいつ渡来したかは実は明らかではない。ただ前述の『嬉遊笑覧』の中にも「簪曝雜記(?)に、古来構_レ園林_レ者多量_レ石為_レ嵌空險峭之勢_レ、自_レ崇禎（1628-45）時_レ有_レ張南垣創意為_レ假山_レ以_レ宮邸北苑（中略）巧奪_レ化工_レ、云々」の引用文があり、假山といふ漢語がそこに記載されている。又、『嬉遊笑覧』は別に「園冶と云う書有り、表題に名園巧奪天工と記せるは書賈などの名づけしなるべし。崇禎辛未自叙あり作者計無否とありもと画人といへり」とのべその興造論（借景等）を詳しく紹述しているから既にわが国に渡来したことが判る。その中に（仮山依_レ水為_レ妙、徇_レ高阜処_レ不_レ能_レ注_レ水、理_レ潤壑無水_レ、以_レ有_レ深意_レ」とか「掇山」などの用語解もあり中国で「假山」の用語が定着していたことは明かである。

試みに塩谷温編『新字鑑』に「『假山』、土石をきづいて作った山、築山。「皮日休詩『菓草須_レ教_レ上_レ假山_レ』」ともあり、假山を中国源流とすれば假山→假山水←枯山水という図式も可能となる。すなわち假山水は正に和製漢語に近く、枯山水の場合は『尺素往来』で（フルセンスイ）、又室町期後半の書と見られる『庭訓往来註』（東洋文庫本242、石川松太郎校注参照）に（カラセンスイ）とあり、前者は「枯山水」後者は「枯泉水」の漢字を充当させている。このような山水と泉水の乱用は『平家物語』の類書が示す通り（拙稿「庭と山水」造園雑誌46(4)参照）当時の慣例であり、これによって何れも「センズイ」と読むことが明白となる。

しかし、枯山水の用語は『尺素往来』以後ほとんど見ることがなく、もっぱら假(仮)山という二字に統一されていることが窺える。例えば黒川道祐著『雍州府志』（1684）は「凡石之大小有_レ峯巒之体_レ者置_レ假山_レ、其經營之人称_レ庭作_レ、云々」と定義している。又、『書言字考節用集』（『古事類苑』所収、1689-1704成）にも「假山（ツキヤマ）、茂陵富人袁広漢築_レ園構_レ石為_レ山、高十餘丈、是假山之始也。見_レ西京雜記、詩格註」と假山の由来を記述している。又当時の解説書『人倫訓蒙図彙』（1699刊）を見ると「（庭造）筑山又は假山ともいふ。むかしより有り久しきもてあそびなり。夢窓国師自然の数寄にして此の人の流れあり。西山の西方寺の庭夢窓国師の作よって是をまねぶ也。庭作に法式あり、云々」ともある。又地誌『雍州府志』（1684）にも「夢窓国師性好_レ水石_レ故每所_レ住水石之跡多。凡本朝作_レ假山_レ有_レ兩流_レ嵯峨流四條流是也。其内所謂嵯峨流者夢窓国師之模範也」とあり、さらにやゝ後期の菊岡沾涼随筆『本朝世談綺（假山、つきやま）』（1733）には「日本紀に推古帝の御宇百済国の化人路子工というものはじむと也。

本朝筑山を作るに嵯峨流四條流の二派あり。天竜寺の開祖夢窓国師水石を喜んで天性その妙あり。是れ嵯峨流也。天竜寺、臨泉寺、西方寺の假山みな同師の作也。大徳寺の大川院東山双林寺の假山は東山殿の童眞相阿弥これを作る。近世の名人なり。竜安寺の疊石は細川勝元の作ると云ふ」ともあり、更に幕末期の会津藩士沢田名垂の『家屋雜考』（1842）では「（假山）築山なり又石立といふ事なり。是は庭の岩組をする事なり。推古紀に百済の人をして南庭に須弥山のかたちを造らしめられ又斎明紀に飛鳥岡本宮に石山丘を造らしめられ又甘櫛丘の東の川上及び石上の池辺に須弥山の形を造らしめられしなどという事見え、是等庭に山を築き岩組などする事の初めなり」（『古事類苑』所収）などと假山様の造庭式が庭造本流視されていることが窺え、假山既ち築山・石山の義と解し、築庭全般をも包括するが如き観を呈するに至っている。

そしてその主力の座に夢窓国師を定着させているのも特色である。ところで疎石夢窓に関する記録には（假山水）という用語が使用されている。甚だ興味を覚える。例えば『西方寺縁起』（『群書類従』所収、1400）の「国師天性假山水のおもむきを得て嶋々洲崎よろしき所にしたがひて佛閣僧舎を建て又そのあいだに奇石怪樹の有りさま世に九山八海を移し給う、云々」の如きもその一示例である。又国師語録に「假山水韻」があり、既ち「纖塵不_レ立峰巒峙、涓滴無_レ存澗瀑流。一再風前明月夜、箇中人作_レ箇中庭_レ」（柳田聖山著『夢窓国師語録（解説）』昭58、久恒秀治著『作庭記秘抄』昭54参照）。とあり、その前段を柳田は「塵一つ立てないで高山がそびえ、水一滴も用ひないで滝が流れおちる、云々」と解している。正に寸尺の地に水なき石庭を考案したことにはちがいない。なお夢窓と対立の虎関師練にも「假山(水)賦」がある。（『済北集』参照）すなわち「簣土施_レ功聳_レ半庭_レ、移_レ松種_レ竹結_レ寒盟_レ。一尋瀑布勢千尺、只自磊砢奇石成」という。そして、やゝ時代は降って既述の鉄船禅師の『假山水譜』（「大雲山詩稿」所収、1477）もあり、このほか假山水の用語の実例は龍泉令淬（1365没）の『松山集』に（題_レ藤壺假山水_レ）とか雪村友梅の『宝覺真空禅師語録』（1346）の（三条殿假山水）とか疎石夢窓の『臨川家訓』の（予於_レ三會院東_レ構_レ假山_レ、云々）（外山英策著『室町時代庭園史』昭9、重森三玲著『枯山水』昭40、久恒秀治著『作庭記秘抄』昭54など参照）などと比較的多く使用されている。とすると假山水→假山←枯山水という図式も成り立つ。すなわち「假山」を挟んで假山水と枯山水とが時代的経過の中で融合してゆくかとも考えられるが、假山にしても假山水にしても『作庭記』の枯山水用語を意識しているとは先ず考え難い。それは後述の通り明治という時代の到来を待たねばならなかったといえよう。もともと室町時代後期の辞典書すなわち『節用集（文明本）』に「泉水、サンスイ或作_レ前

水・庭也」とあり、又『撮攘集』(1454)には「假山即山水也」とあり(拙稿「庭と山水」参照)、これらによって当時既に假山水→假山、山水＝泉水のような図式が成り立っていることも十分窺える。そして既にのべた徳川時代の文献例えば『人倫訓蒙図彙』(1699)には「(庭造)築山又は假山ともいふ」のような、又『雍州府志』(1684)に「本朝作_レ假山_一有_二両流_一、云々」、『本朝世事談綺』(1733)に「假山(つきやま)」、『家屋雑考』(1842)に「(假山)築山又石立といふ、是は庭の石組をする事なり」など、假山→築山→庭造となり枯山水に対応すべき假山水のような用語すら意味曖昧となって徳川時代は終わっている。従って当時の代表的造園書『築山庭造伝(前・後編)』の中にも枯山水の用語は勿論假山水の用語もないし、明治初期の造園書『園芸考』(明22)も亦『作庭記』の記述の中の枯山水の文字はあっても深く言及されることのなかったことも既述した通りである。

昭和初期の時代に先学者田村剛博士の論文「庭園と公園」(『万有科学大系・続VI、昭4所収)に「枯山水」とか「廻遊式」とか「借景」「縮景」などの用語が盛んに活用されている。この田村論文は東大講師として当時の講義用に使われ、筆者も受講生の一人であったからその実感は正に強く受けている。その際、(枯山水)の用語の使用はただ「大仙院の枯山水」とのみあり深い究明はなされていない。もっとも徳川時代の関係文献でもほとんどが「假山」の代表庭園としての大仙院や竜安寺の石庭であって、既に述べた通り枯山水の用語は全く使われてはいない。そこで田村の場合はその大きな相違点として「枯山水」の用語を使っていることにある。

試みに『園芸考』(1889)から田村論文(1929)の約40年間のほぼ中間点の造園書本多錦吉郎著『日本名園図譜』(明44、復刻版平凡社昭39参照)を開いて見ると、その中に枯山水用語が使用されている。画家本多はみずからの多数の写生図の中で枯山水式庭園として本法寺・聚光院・大徳(仙)院をあげている。しかも、大仙院を「所謂枯山水の好型」と云ひ、聚光院は「枯山水式に属する水なき庭」などの解説も行っている。さて当時本多が『日本名園図譜』を何故に出版するに至ったかは本多自身発刊の趣意を次のように述べている。「著者性癖庭園に興味を有し記録を渉猟し各地を歴訪して研鑽頗る力む。明治二十六年仲夏筆硯を載せて京都に遊び実地に就き其の名園を図写して帰之を梓行せんと欲せしが、故ありて果さず客歳晩春旧稿を携へて再び京都に遊び之を現状に对照して修正を加へ茲に始めて本書を成す。而して本書を発行する越意は実に左の二項に存す」とし、その第一は「造成の模範を広く世界に紹介すること」、その第二は「名園の真景を永く後世に保存すること」で、特に当時既に建築物には特別保護制度があったにもかかわらず、それと表裏一体を為す名園の保護については全く手がつけ

られず、又庭園は人によってたやすく変形し且つ樹木のように絶えず生長変様することを考えれば、まずこれらの観望図を示すはかはないとしたのである。さらに観望図示に止まらず平面図をも添付したのである。正に綿密な考慮のあったことが窺える。しかも本「図譜」の解説文の中には横井氏の名もありこれは『園芸考』の著者横井時冬ではないかと思われるし、又、序文として森鷗外の論文「園芸小考(旧称園芸略説。明29)」を同文掲示しているところを見ると、『園芸考』の中の枯山水(『作庭記』所収)の用語の如きも考慮の対照としたことは十分考え得るといえる。

さて時代は現代に入ってゆく。冒頭(1.発端)でふれた通り志賀直哉(大正13年)、西田直二郎(同)、室生犀生(昭9)などの文化人の石庭・枯山水への関心の深さが加ってくる。そしてその間に田村論文(昭4)あり、静居松之助著『日本庭園史要』(昭7)もこれらにつづいている。しかし枯山水に対する本格的な論議は未だない。

そこで注目したいのが、横井の『園芸考』の註釈書として出版された堀口・森共註『日本庭園発達史』(昭15)の中の註記の一文といえる。すなわち「枯山水は従来枯(カレ)山水と読まれて室町時代に流行せる石と砂を主とした象徴的庭園であるというのが日本庭園史の通説になっている。然るに最近の研究の結果室町時代の水なくして水あるが如き庭園は唐山水(妙心寺退蔵院文書)或は乾泉水(源平盛衰記)なる語があてはまり、枯山水は藤原時代に片山岸や野筋等に石を立てたるものを定義しており、『山水并野形図』には故山水の語があり、故は学(マネ)びの意であるとも解され、又故う作りなせる山水、故びたる山水の意であるらしくも思われる。又一条兼良公の『尺素往来』には枯山水(フルセンスイ)様の訓読が行われてあるのは注目される。枯山水の語義に就いて森蘊(枯山水に就て)宝雲第23輯がある」とある。

これで『園芸考』の中の『作庭記(枯山水)』がクローズ・アップされてくるし、冒頭で述べた『尺素往来』の中の引用文も生きてくる。もっとも同書は本稿紹介の『嬉遊笑覧』の中の枯山水論にはふれていない。しかし、このような訓読解には『嬉遊笑覧』を先行書にあげることが必要であるし、さらに夢窓疎石らの「假山水」論も無視することは出来ない。そこで近來西芳寺裏山の洪隠山岩組の枯山水論議が活発になって来たことでも判る。造園雑誌上の梅沢篤之介稿「枯山水の研究(1)西芳寺洪隠枯山水」(第23巻第4号、昭34)や堤久雄稿「西芳寺洪隠山石庭」(第25巻第2号、昭36)などもその特例の指摘にちがいないが、しかし、これらの根元の「枯山水対假山水」という主題を明確にしない限り解明は難かしい。

造園史家吉川需も著書『枯山水の庭』(昭46)の中で「洪隠山の枯山水は『作庭記』の枯山水の一例であるとされる場合がかなり多い。池あり遣水のある庭とは別個

に山畔に作られているからである。しかしこの説は受け入れられがたい。それはこのような上部と下部との庭区の構造は作庭記風の地割りから生まれたものではないからである。日本庭園史の中にかかる立体的な地割りが現われるのは夢窓国師の作庭がその最初であり、この構成方法が後世に影響したところは絶大であって例証には困らない。云々」とのべている。筆者もこの見解に敬意を表する一人で、夢窓疎石時代の「假山水」観は自然の中から抽象化され象徴化された人為的な假（カリ）の山水であって自然そのまゝではない。（末尾『夢中問答』参照）。しかるに『作庭記』の中の「枯山水」は自然の又は自然味のまゝの中の水のない枯山水観といえる。作為に乏しい作庭であることに特質がある。この「假山水」⇔「枯山水」の図式が明治期に入って、これまで「フルセンズイ」とか「カラセンズイ」とか「コセンズイ」とか訓読されてきたものとはかかわりなく、「カリ」→「カレ」のような枯淡幽玄味のある読み方に、故意か偶然か暗黙のうちに連動して今日に至ったものと言わざるを得ない。したがって時と次第では、今日の重森三玲著『枯山水』（昭40）に見られるような「前期式枯山水」、「後期式枯山水」となったり、また吉河功著『京の庭』（昭56）のように「平庭式枯山水・準平庭式枯山水、枯池式枯山水・枯流式枯山水、築山式枯山水・池泉式枯山水」と増幅されることにもなりかねない。その判断こそ造園界に課せられた大きな責務といえよう。即ち、わが国造園史の正流からすれば假（カリ）山水が正当であり、枯（カレ）山水は今日的日本人の心情からすれば妥当であるが「フル」とか「コ」とか「カラ」の訓読論議（一例、芳賀幸四郎稿「枯山水」）はあまり意味がない。田中正大稿「枯山水考」（造園雑誌第19巻第2集、昭30）参照。

3. 付 言 ——（附）石庭論と山水論

以上、枯山水の歴史的体系を究明したのも筆者の造園関係用語史研究の有力な一示例と考えたからである。そこでこの機会に筆者の用語解に対する心がまえを、試みに「枯山水」の中の「山水」を一例として付言してみたい。この場合の山水は明らかに庭園（苑）という用語の代用語であってこのような解釈がいつ頃から定着したかは造園の歴史を知る上にも十分参考となるはずである。このことは拙稿「庭と山水」で詳しく言及したところである。

その代表例として久恒秀治著『作庭記秘抄』（昭54）の中に「法皇（鳥羽）御_ニ寝殿南廂_ニ眺望山水_ノ」の一文がある。これは藤原頼長（1156没）の日記文『台記、（仁平元（1151）年二月十四日の条）』からの引用文で、この山水は庭園を意味するとも解される古い例としてよく引用されるが、しかしこの中の「眺望」という語字から判断すれば寝殿の庭園そのものよりもむしろその周辺の山水

的景觀に対するものという解釈も成り立つ。そこで問題なのはこのように特定の用語解が生れさらにそれが一般的な通常語として普及してゆく時代観は一つの稀に見る先例を重視するよりもむしろ同時代の多くの文献の中でしばしば活用されているその時代こそ注目して然るべきものと言うべきである。とすれば山水＝造園という用法もまたその時代観は鎌倉期以降となる。このような用語解は山水のほか名所とか野筋とか生得のような用語にも相通ずることで今他の一つの示例をあげて見る。

平安後期の代表的歴史書に先づ『日本記略』（1036成立）が、又鎌倉期に『吾妻鏡』（前半1273頃成立）が、そしてその中間に『百鍊抄』があって、その中に「永久三（1115）年九月廿一日上皇御_ニ幸宇縣富家別業_ニ楽_ニ山水之興遊_ノ」と庭園池水の遊興のことがみえる。この歴史的事実は別にしても百鍊抄の成立が1274年代とすればその山水の用語例は鎌倉中期の通常語と見ることは十分可能である。又名所の用語例としてあげられる『建礼門院右京大夫集』の例もその編成が1233年頃（岩波本解説）とすればその用語の時代も十分理解出来る。その他「生得」の歌人西行（1140出家）の『山家集』に「名所の月といふことを」と題して「なべてなき所の名をや惜しむらむ明石はわきて月のさやけき」の一首があり、これは「所の名」から「名所」への転換時期を示しているものとも云える例である。（拙稿「名所と造園」昭60参照）。（附 記）

① 石庭論。豫楽院関白近衛家熙述「静安寺ノ庭ハ相阿弥ガ作ニテ虎ノコワタシヤラン名高キナガラ私テイノ見テハ好悪ノ論ハ及ビガタシ。一向上（昔？）ノ事ニヤ。又金閣寺ノ九川（山？）百（ハ？）海ノ庭ハソレトハ各別ニテ工（タクミ）ヲ盡シタル物トハ見ヘナガラ堅キモノ也ト申上シカバ御前ニモ両處トモ御覧アリ、大徳寺中ニモ相阿弥ガ作ノ庭アリ今日ヨリ見テハ合点ノイカヌモノナレドモソレニモイカフ法ノアル事ノ由也。（中略）コレヲ見彼ヲ渡ヲミレバ昔ノ人ノ深山ノ深山ヲココニ写スココロニテ致シタルモノニヤト仰セラル。スレバ竜安寺・金閣寺ニモ左の事侍ルヤト仰セラル。（中略）スレバ是モ却ツテ幽谷ノ幽谷ヲ見テ作りヌル物ニヤト申シカバ、サレバサレバ先年ノ木曾路ガ寢覚ノ床ハ今ノ作り石庭ノ自然ナルモノ也。是ニテハシカラレモセヌト申シタリシガ、ナルホドニモットモト仰セラル、云々」（『槐記』享保十四（1729）年五月十八日、横井時冬著『園芸考』明22より）

② 山水論。疎石夢窓国師述「（万事を放下せよ）古より今にいたるまで山水とて山をつき石をたて樹をうゑ水をながして嗜愛する人多し。其の風情は同じといへども其の意趣は各々ことなり。或は我が心にはさして面白しとは思はねどもたゞ家のかざりにしてよその人にいしげなるすまふかなといはれんためにかまふる人あり。

或はよろずの事に貪著の意ある故に世間の珍宝をあつめて嗜愛する中に山水をもまた愛して奇石珍木をえらび求めて集め置ける人もあり。かやうの人は山水のやさしきことをば愛せず只是れ俗塵を愛する人なり。白楽天小池をほりて其の辺に竹をうゑて愛せられき。其の語に云はく竹は是れ心虚しければ我が友とす。水は能く性浄ければ吾か師とすと云々。世間に山水をこのみ玉ふ人同じくは楽天の意のごとくならば實に是れ俗塵に混ぜざる人なるべし。或は天性淡泊にして俗塵の事をば愛せずたゞ詩歌を吟じ泉石にうそぶきて心をやしなう人あり、煙霞の痼疾泉石の膏盲といへるはかやうの人の語なり。これをば世間のやさしき人と申しぬべし。たとひかやうなりとも若し道心なくば亦是れ輪廻の基なり。或は此の山水に

に対してねぶりをさましつれづれをなぐさめて道行のたすけとする人あり。これはつねざまの人の山水を愛する意趣には同じからず、まことに貴しと申しぬべし。しかれども山水と道行と差別せる故に真実の道人とは申すべからず。或は山河大地草木瓦石皆是れ自己の本文なりと信ずる人一旦山水を愛する事は世情に似たれどもやがてその世情を道心として泉石草木の四気にかはる気色を工夫とする人あり、若しよくかやうならば道人の山水を愛する模様としぬべし、(山水には得失なし、得失は人の心にあり)、云々(『夢中問答』(1343)、『築山庭造伝』(1735)より)。

1) 縁先盆假山 (盆景)

『春日権現験記絵巻』(1309)

2) 縁先鉢木

3) 僧房側庭枯山水風

4) 懸樋 (笕) と岩組

『慕帰絵詞』(1351)